綴葉 ていよう

'17 12

No.363

あなたが創る生協の書評誌

話題の本棚

カズオ・イシグロ著『忘れられた巨人』

外山恒一著『良いテロリストのための教科書』

特集／私の一冊

新刊コーナー／新書コーナー／新本格への誘い

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町　吉田南生協会館２階

Tel：771-6211 ／ E-mail：teiyo@s-coop.net

綴葉HP：http://www.s-coop.net/about_seikyo/public_relations/

univ. CO-OP 京大生協 綴葉編集委員会

因果の波乱と忘却の平和

忘れられた巨人

カズオ・イシグロ著
ハヤカワepi文庫

《一見平和に見える世界も一枚皮を剥がせば憎悪が渦巻いている》

カズオ・イシグロが本書の着想を得たのは冷戦が終結して間もないユーゴ紛争であった。対立の壁が無くなり「平和な世界にしていこう」という信念が勝者の欺瞞でしかありえず、一度バランスを崩せば憎しみの連鎖が留まることのない世界を見た時、彼は一つのアイデアを胸に抱いた。それは国家や社会という共同体が「何を忘れ、そして何を忘れてはならないのか」という問いである。

――そのテーマが本書に結実するのに十年以上の月日が流れた。折しもノーベル文学賞受賞後、大注目の中で文庫本として発売された本書には、私たちが「どのように歴史と向き合うべきなのか」というシリアスなテーマが、ファンタジー文学を通して柔らかに表現されている。

忘却の秘密の向こう側

舞台はアーサー王物語を下敷きにした五・六世紀のブリテン王国。重大な出来事が過去に起こったはずなのに、この土地の人々の記憶には霞がかかり、過ぎ去った日々を鮮明に思い出すことができない。村に来る前の生活も思い出せず、昔出ていった息子の顔さえも思い出せない老夫婦は、自分達の「記憶」を取り戻すために旅へと出掛ける。道中、鬼に攫われた少年、異国から来た謎の騎士、アーサー王の元部下だった老兵を巻き込んで進んでいくこの物語は、忘却の原因を探るため、山頂に住むドラゴンの秘密へと繋がっていく。そしてこの秘密の向こう側に見え隠れする、忘れたくなかった思い出と忘れてしまいたかった記憶。歴史に見境はない。取り戻したかった過去を手にしようとする時、蓋をしたかった因果も手に入れてしまう。忘れることによって私たちが今を生きられるのであれば、思い出すことは今を否定してしまうことなのだろうか。

復讐と赦しの神

共同体の記憶を巡る本書の記述は、平和な社会における《寛容の欺瞞》さを暴いていく。「あなた方が自分たちのためだけに慈悲深い神をつくり出したのは、ちょっと都合がよすぎないか」「あなた方の兵隊がどんな残虐非道なことを行なったとしても……心から悔い改めて祈りを捧げれば許してくれる。そんなふうにどこまでも慈悲深い神をつくり出したのはズルくはないですか?」という言葉によって、寛容の秩序が忘却の無責任の裏返しではないかと明示される。勝者が慈悲の神を築いて過ちを水に流そうとする時、敗者は因果応報の神を築き上げ復讐の正義を画策する。この過去を巡る神々の争いに、私たちはどのように調停を作るべきなのだろうか。

人間は過去を完全に忘れ切ることも出来ず、しかし寸分も間違えずに思い留めることも出来ない。この揺れ幅の曖昧さが、私達に物語を必要とさせる。共同体の記憶と寛容の欺瞞という普遍的テーマを扱った本書はノーベル賞に相応しい文学であろう。　（きもの）

（四九六頁　税込一〇五八円　10月刊）

右は彼を知るために、左は己を知るために

良いテロリストのための教科書

外山恒一著
青林堂

「少数派の諸君、選挙で何かが変わると思ったら大間違いだ。所詮選挙なんか、多数派のお祭りに過ぎない。我々少数派にとって選挙ほど馬鹿馬鹿しいものは無い。多数決で決めれば、多数派が勝つに決まってるじゃないか」。外山恒一が都知事選の伝説的な政見放送でこう言い放ってから十年が過ぎた。この間の経過を前にして、あらためてこの言葉を呼びかけられたものとして想起した「少数派の諸君」は、今こそ外山の言葉に耳を傾けてみてはいかがだろうか。

外山の久々の単著は、右傾した若者向けの批判的左翼運動史を内容とし、今や極右本で有名な版元から出版された。本書の基調にあるのは、現代の規範的風潮であるポリティカル・コレクトネスへの批判である。確かに、目を光らせてトリヴィアルな差別的言動を取り締まり、糾弾する風紀委員的な左翼に辟易している人は多かろう。とはいえ、PCへの反発は単なるバックラッシュに陥りがちである。このアポリアを突破することはいかにして可能なのだろうか。

本書の表現を借りれば、社会のPC化は、新左翼が「試合に負けて勝負に勝った」帰結である。戦後民主主義を批判の対象として直接行動で闘争した新左翼や全共闘は、一九七〇年の「華青闘告発」を契機として、「加害者としての自覚」と「自己否定」を志向する反差別運動へと転回し、それはPCとして社会の全域を覆っていった。「華青闘告発」に対して、著者は自らのナショナリズムに開き直ることによって応答し、全共闘の批判的継承を別のしかたで模索する。かくして異端的極左活動家から転向した「ファシスト」を自称する外山は、それをこけおどしの空論とせずに、自身の思想的立場として運動史のなかに位置づけたのである。

八〇年代以降の左翼運動を次の三つの潮流に整理した第三章は、「本書でしか知ることのできない」という自負も頷けるほどの圧巻である。新左翼ノンセクト・ラジカルの系譜をひく「ヘサヨ」。外山自身が属する、新左翼からの差異化を試行錯誤してきた「ドブネズミ系」。九・一一や三・一一を契機に登場してきた、共産党とも親和的な「パヨク」。これらの三潮流が錯綜する模様を明快に描き出した歴史叙述は、現在の左翼運動の諸相を見晴るかすための優れた手引きとなるであろう。また、運動の当事者・非当事者を問わず、今後様々な立場からの参照や検討が期待されるものである。

それにしても、外山恒一は単なる反動とどこが異なるのか。「在特会」シンパですらありうる本書の主要読者層に対し、外山は排外主義や同化政策を批判しているが、それ以上に注目すべきは、「パヨク」の初期しばき隊への高い評価である。しばき隊はアイデンティティ・ポリティクスから離脱して、あくまでマジョリティの立場のまま直接にレイシストと対峙し、街頭での嫌がらせ行為を阻止した。反PCを際どく訴えながらも、バックラッシュの陥穽を乗り越える可能性の萌芽は、このあたりにあるのかもしれない。（霊人）

（二一七頁　税込一二九六円　9月刊）

〈特集〉私の一冊

本というものに親しみを感じる人なら誰しも、これぞと思う、個人的に思い入れの深い一冊がきっとあるはずです。理由は人それぞれでしょう。それは、進路を決めるきっかけになった本かもしれませんし、あるいは読書にはまる原因となった読み物かもしれません。今回の特集では、『綴葉』編集委員がそのような一冊を紹介します。ぜひ、読者の皆さんも「私の一冊」を考えてみてください。そして、もしよろしければ読者カードでご意見をお寄せください。

（蕨餅）

京都の平熱 哲学者の都市案内

鷲田清一著
講談社

それはまだ、「評者」などという一人称を使ったことがなかった頃、下宿住まいのわたしは自転車を引きながら、206番に乗って帰るひとを正門前のバス停まで送っていたことがある。そのひとが微笑みながら振る青春のような右手が、自分の生きる意味になっていた、そんな日々があった。

さて、何という愛に満ちた一冊だろう。西本願寺の北、天使突抜というけったいな名の通りの近くで生まれ育ち、京大に学んだ、言葉の肌理というものを評者に教えてくれた哲学者が、京都駅から循環する206番に乗り込んで各場所にまつわる話を語ってゆく。ただし、いやもちろん、ふつうの観光案内ではない。

著者の言う京都の平熱とは、日常の中に口を開けた非日常ないし別種の日常につながるいくつもの「孔」の蠢きの、その官能の熱量のことである。ゆえに徹底して裏の顔や地元のいとなみに寄り添う。こってりラーメンの、こだわり洋食の、精密機械工業の、伝説的な奇人たちの、西部講堂の、さてんの、元祖と本家の、哀愁の場末酒場の、千本日活の街。極致がたくさん現出していてノイズ溢れる街。古都とはいえ多様性が重層する街。だから京都は、すべてが均質化する時節にあってもなお、住みよくて自由でおもろいのだ。

10年前の本なのでやや古い情報もあるが、観光と開発がますます進展する今日、2000年に「京都市基本構想」をとりまとめた著者が描くわれらが都の姿には光るものがある。

そう、どんな時も市電やバスは巡る。それぞれの滾る想いや底冷えの心を乗せて走り、平熱は息づく。愛の、温度だろう。　（春海）

（258頁　税込1836円）

崇高の修辞学

星野太著
月曜社

書物を紐解いて、「あ、この言い回し好きだな」などと思うことはないだろうか。それに、たとえば『平家物語』の「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり」や夏目漱石の『草枕』にある「智に働けば角が立つ、情に掉させば流される」など、なぜとはわからぬまでも記憶に残る表現というものが書物には見出される。このような「文体」や「文彩」が言葉にはつきものなのである。

言葉が紡がれ残されてきたのと同じくらい古くより言葉による表現についての分析や研究、すなわち修辞学の研究もまた行なわれてきた。アリストテレスの『詩学』などが有名なところであるが、その中でも紀元1世紀に著されたとされる伝ロンギノスの『崇高論』は、そのように読者の心を動かす言葉の働きを「崇高」と名付けた概念によって提示した。それは修辞学に留まらず、18世紀以降、エドマンド・バークやカントなどによって美学や哲学の分野へと翻案され引き継がれる概念となっていった。そのような古代より今日に至るまでの長きにわたる「崇高」を巡る研究の系譜を丹念に追い続け解き明かしてくれるのが本書である。本書を片手に、もう一方の手にはロンギノスの『崇高論』の翻訳なり原書なりを持ちつつ言葉の表現の奥深さに思いを馳せるのも一つの楽しみであろう。さらに『崇高と美の観念の起源』や『判断力批判』を手に取ってもらえれば、評者としてはこの上ない喜びである。言葉は常にわれわれと共にあるもの。そして、「われわれが用いる言葉のうち、およそ修辞的でない言葉など存在しない」のだから。　（ねこ）

（287頁　税込3888円）

ことばと文化

鈴木孝夫著
岩波新書

大学入学直前の時期、受験勉強から解放された評者は何とも言い難い脱力感を覚えていた。暇なのだが何をしたらいいかわからないようなそんな感覚だったように思う。そして、その埋め合わせのためか評者は大学の新入生のための推薦書のリストから何冊かを読んでやろうという気持ちに駆られていた。その気持ちと同時に文学部へ自ら志望したにも関わらずその学問の領域がどこまであるのかという素朴な疑問も抱いていた頃だった。そのなかから選んで読んだのが本書だった。

本書の読みどころはことばとものの関係の逆転である。我々にはものが先にあって、それにことばによって名前を与えるという思考が当然の考えとしてあるはずだ。だが、よく考えてみるとそれは当然とも言えなくなる。例えば、「机」を定義すると人が何かをなすための平面とでも言うしかないが、それに当てはまるのは棚や床などもあり、決して「机」だけではないはずだ。つまり、「机」をしっかり定義するためにはことばによるしかないのである。ことばがこのカオスな世界を整然とさせてくれるのである。

ある意味有名な論だから知っている人にとっては当然かもしれないが、その当時無知だった評者にとってはこんな考えがあるのかと今までにない自らの世界が広がったような感覚を受けた。ことばは一つではないがゆえに世界も無数にある。評者は当たり前に使っていたことばをいつもより偉大に感じた。そして、本書によって入学前に抱いていた脱力感が多少掃われ、そっと学びの入り口に誘われたような気がしたのだった。　（ういろう）

（209頁　税込778円）

フランス革命という鏡
十九世紀ドイツ歴史主義の時代
熊谷英人著　白水社

私たちが歴史を学ぶとき、最も意識すべきことは何か。その歴史が史実に即したものであるかどうかということである。この歴史認識における客観性や実証性の重要性は誰もが賛同するところであろうし、歴史家もその意識のもとで様々な史料を厳密に精査して史実を突き詰めようと日々精進している。

だが、そうした客観性を担保する歴史研究自体を起動させ推進するのは、何らかの問題意識に基づく主観的な動機であるということを私たちは意外と忘れがちである。またそれが歴史研究においてより根源的な要素であることを思い出すとき、後世の人間の目から見れば党派的であるようにしか見えない過去の歴史研究の成果も、その客観性の不足により切り捨てるのではなく、それを生み出した歴史家の問題意識を照らし出すものとしてその価値を問い直すことが必要になるはずだ。それはすなわち当時の社会に対する歴史家の切迫した生き様へと、彼の作品を研究することを通して、迫っていくことに他ならない。過去の歴史家の生の光芒をその緊張性において捉えること――それこそが歴史研究なのだ。

このように歴史家の張り詰めた生の表現として歴史研究を読むことを私は、混迷した19世紀ドイツ社会を生きた3人の歴史家の生を鮮やかに描いた本書から学んだ。ダールマン、ドロイゼン、ジーベルと今では党派的だと言われる歴史家だが、自身のフランス革命研究のうちに、ドイツの未来の指針を見出そうとした彼らの躍動する生の熱い息づかいを描いた本書を、歴史研究の真髄を表したものとして全ての人に薦めたい。　（ニコ）

（374頁　税込3672円）

正統とは何か
G.K.チェスタトン著、安西徹雄訳
春秋社

本書が刊行されたのは20世紀初頭のロンドン。半世紀前にはダーウィンの進化論が信仰に引導を渡し、「神は死んだ」と言って「超人」なるものを提唱する者まで現われた。人びとはウェルズが描く未来世界に心躍らせ、ホームズが示す卓越した論理力に熱狂した。果たして、そんな幻想が二度の大戦によって崩れ去ったのは言うまでもない。そして続く現代社会。私たちはいまだ、次に何を信じていいか分からず、右往左往している。

人は何を信じるべきか？　私は何を信じるのか？　現代社会は、「自由」とか「寛容」とか繰り返すだけで、本当に欲しい答えを教えてくれない。斯く言う評者も数年前、留学中の出来事がきっかけで虚無状態に陥り、真理不在で生きていく不安から抜け出そうともがいていた。確かにニーチェの言う「超人」を目指すのも一つの手だろう。しかし弱い評者はやはり真理が欲しかった。弱いと分かりつつ、自分を意味づける真理が欲しかった。

さて、冒頭で述べた通り、これは単に評者の悩みではなく、時代を直視すれば向き合わざるを得ない現代の宿命的な悩みだと思う。本書はその出発点にあって、ニーチェ（とそれに続く現代思想）とは異なる答えを与えてくれる。それは「超人」ではなく「凡人」の感性だった。「人間を超えて強くなる」のではなく「一人の人間として弱さを愛する」ことを説くのである。チェスタトンの文章は美しくも力強い。それは、心の穏やかさだけでなく、燃えるような決意も与えてくれる。評者と似た悩みを共有する人へ、本書があなたの「私の一冊」となりますように。　（いの）

（305頁　税込2700円）

水惑星年代記

大石まさる著
少年画報社

恥ずかしながら、今回の特集題だと選べるのが漫画だけになってしまう。大学で自由の身になると、バイト代を全て映画につぎ込んだり、自宅の本棚をCDで埋め尽くすことを目標に生きる存在になる人間がよくいるが、僕は漫画でそうしようとしていたからだ。結局のところかなり中途半端なところで漫画棚からは足が遠のいてしまったけれど、今回はその中から1シリーズを紹介したいと思う。

本作は、大石まさるが描く近未来を舞台とした短篇集である。爽やかな世界観と朗らかな人間ドラマが混ざりあった嫌味なく健康的な世界観がとても心地よい。登場するキャラクターの描き方も、地に足をつけて生きる人たちらしく（ときどき宇宙を遊泳しているものの）安心感がある。6巻の単行本が刊行されているが、ちょっと典型的な日本の生活風景と、宙が近くなった世界観をミックスした作品としての完成度は高い。明暗の書き分けにも特徴があるので、そこにも注目してほしい。

宇宙が舞台とはいえ、SFというには人間模様が前面に来すぎているので、そういった需要はあまり満たせないかもしれない（その辺りにはよく幸村誠『プラネテス』が薦められていると思う。これも面白い）。それに、一気に読ませる漫画という訳ではないけれど、そういう作品をここで紹介しても適切ではないと思う。僕にとっては、おりに触れ読み返したくなるような、安心できる空間であり、そういった漫画が「私の一冊（まんが）」だと思う。一読すれば、その一冊に加えたくなるだろう人も多くいるはずだ。　（トロ）

（203頁　現在絶版・Web版360円）

微分方程式で数学モデルを作ろう

デヴィッド・バージェス、モラグ・ボリー著
垣田高夫、大町比佐栄訳　日本評論社

本の影響というのは意外に侮れないものである。本を読んで人生が変わることも、その人生が浅ければありうる。こと中高生のころに読んだ本というのは非常に決定的である。今の自分の考え方や価値観は、結局のところ、そのころ読んだ本の残滓ではないだろうか。そう考えてみると、私の場合は本書に影響を受けた面が多いように思う。

本書を初めて読んだのは高校生のころであった。学校の帰りに寄った本屋で立ち読みしてみて、目を見開かされる思いがした。例えば、ある美術品が贋作であることを立証するにはどうすればよいか。作風などから判断することもできるが、本書で紹介される方法は違う。絵具に含まれる放射性元素の量を測定することで、その年代を推定する方法だ。ある放射性元素が予想されるよりも遥かに多量に含まれるがゆえに、この絵画は近年の贋作であると結論する訳である。このとき本質的なのは、ある現象を数学的にモデル化し、そこから予測を引き出すという手続きである。本書には、このような考え方の強力さを実感させる具体例が多数載っている。広告の効果、漁獲量の予測、果ては戦争の勃発まで、数学的に分析して見せる。この方法論は、当時の私に強烈な印象を残した。特に、そこで中心的な役割を果たす数学的概念である、微分方程式を少し勉強してみたことがきっかけで、関連する分野を専攻することとなった。

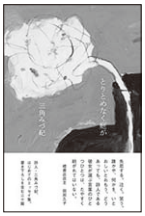
個人的なことを述べてきたが、本書の内容はきっと誰にでも興味深いはずだ。数学的モデルを用いた分析の強力さをぜひ味わってみてほしい。　（蕨餅）

（222頁　税込3780円）

新刊コーナー

とりとめなく庭が

三角みづ紀著
ナナロク社



《強くなることが鈍感さならば、繊細になることは弱さなのだろうか》

味が分かると、不味いものにもよく出会ってしまう。小さな優しさに気づけると、言葉の裏に隠された僅かな棘にも痛手を負ってしまう。人は傷だらけでは生きていけないから、鈍感という鎧を身にまとう。それでも時に自分の鈍さを脱ぎたい人は、この本を読んでみるといい。初恋のように毎日一喜一憂していた無邪気な感覚が、そこにはある。

現代女流詩人、三角みづ紀による初めてのエッセイ集。各章が一つのエッセイと一つの詩で構成される本書は、詩という精巧な言葉の音楽が、どのような経験と思考で生成されていくかが垣間見える。読んでいると自分の感覚も磨かれて、思わず詩を作りたくなる。

そして一読して思うのは、美しい言葉の裏に隠された彼女の苦しみと葛藤だ。研ぎ澄まされたアンテナによって、世界の甘苦を噛みしめてきたのだと考えてしまう。

「波の声」《もう　無理だという
こともも無理ではなく
難しくしているのは
自分自身を括るから
遠い笑顔が眩しくて
そう思う　わたしも
眩しさであるだろう》

日常の細部に宿る哀しみと喜び。哀傷を知ることでより一層輝く彼女の言葉に、私は今日も惹かれてしまう。（きもの）

（一二八頁　税込一五一二円　9月刊）

ジョジョ論

杉田俊介著
作品社

荒木飛呂彦の人気漫画、『ジョジョの奇妙な冒険』。三〇年以上連載の続く巨編でありながら人気が衰えるどころか読者層がますます広がっているこの作品を読み解くキーワードはズバリ自己啓発。目が点になりそうだが、『フリーターにとって「自由」とは何か』などで知られる著者の言葉を追っていこう。

『少年ジャンプ』系の漫画を貫く原則は「友情・努力・勝利」。確かにその原則は世の自己啓発書の掲げる目標や手段と共通点を持つ。ただし、著者がこの作品において読み解いた自己啓発とは他の自己啓発書にはないものだ。たとえば、作品の中に登場する「スタンド」と呼ばれる超能力。これはその持ち主の隠された欲望や弱さを具現化したものだと著者は読み解く。登場人物たちは彼らの強さで闘うのではなく弱さで闘うのだ。「努力」、それは自分の弱さや欲望の認識とそれを克服しようとする営みである。しかしそれは、乗り越えた強い自己を他者に対して押し出し他者の弱さを拒否するための克服ではない。弱さを相手に曝け出し闘わせるうちに、お互いの欲望に自身が巻き込まれ合って双方ともに変化していく営みなのだ。「勝利」、それは自分の直接の成功ではなく、自分の挫折が誰かの成功に道を開きそれが翻って自分の成功にもつながることだ。そのような認識の変化が自己啓発なのだと著者は述べる。

弱さや欲望の肯定から始まる自己啓発、といえばありきたりだが、この漫画を改めて読んでみるきっかけになりそうだ。（ねこ）

（三二〇頁　税込一九九四円　6月刊）

新海誠絵コンテ集2 君の名は。

新海誠著
「君の名は。」製作委員会監修
KADOKAWA

一年前の八月、後に日本映画の歴史に名を残すことになる作品が封切りされた――そう「君の名は。」である。僕を含む多くの観客がそれに魅了されたが、新海誠作品を全て見てきた僕が改めて感じた魅力は、その圧倒的なグラフィックにある。これは一体どのような過程で生まれたのだろう――常々感じていた疑問に答えてくれるものだと期待して僕は本書を手に取った。

本書は絵コンテ集である。絵コンテとはいわば映画の設計図であり、映像の各カットがラフスケッチされ、それと並んで登場人物のセリフや制作者によるト書きが書き込まれている。

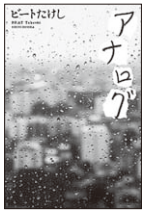
結果的には本書によって僕の疑問は解決しきったわけではなかった。というのもあくまでも絵コンテは原型であって、完成品までの工程を示してくれるものではないからだ。ただし絵コンテを見たとき、すでにその時点において、完成品となった時の映像の持つあの最大の魅力、つまり軽やかで柔らかく淡いタッチ――中でも僕はそれが光の描き方に表れていると思う――、そしてそれにより生まれる幻想性が見てとれることに気付いた。これは絵コンテならではの魅力であると思う。

また、映画を見ているときには気づかなかったような、人物の表情や動きについての細かい指示といったディテールの作りこみを知れるなど、絵コンテの魅力は他にもまだまだある。ぜひ本書を読んで映画を見直し、その魅力をより深く知ってほしい。　（ニコ）

（六四〇頁　税込三六七二円　9月刊）

アナログ

ビートたけし著
新潮社



又吉直樹作品が一世を風靡したこともあり、本書も芸人であり映画監督のビートたけしが書いた恋愛小説として話題だ。

注目作品だからこそあらすじを知っている人も多いだろう。スマホで頻繁に連絡を取り合うことが当たり前になった現代において、喫茶店で待ち合わせという「アナログ」な方法で会うことを選ぶ大人の男女の恋愛小説だ。芥川賞は獲れなさそうだが、恋愛小説としてはなかなか要点をついた佳作である。

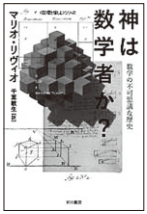
たけしが実際のところアナログ原理主義者なのかはさておき、二人の恋愛劇のあり方は美しいし、これぞ恋愛に求めていたものと思う人も多そう。芸人の書く小説だからこその、主人公の悪友たちの会話にもクスリと笑える。

現代を舞台としているのに、話のネタがちょい古だったりするところには、七〇にさしかかったたけしの皮肉な笑いが込められているように思える。現代の利器を使わないのは、懐古趣味なんてこましゃくれたものじゃなく、使い方がわかんないだけだよ、なんて感じの。

よく言えば恋愛小説の要所は押さえているが、逆に言えば全てが「たけしだから書ける」と思えるような小説ではなかった。けれど、結末は装丁のブルーが似つかわしい、寂れた余韻を持っている。一七〇頁の中編だし、興味のある人は気軽に手にとっていいのではないだろうか。後悔しない作品に仕上がっていると思う。　（トロ）

（一七一頁　税込一二九六円　9月刊）

神は数学者か？
――数学の不可思議な歴史
マリオ・リヴィオ著
千葉敏生訳
ハヤカワ文庫ＮＦ



数学なんか何の役に立つのか、というクリシェはあれども、その有用性を本気で疑う人は今日では多くないだろう。確かに自分で使うことは少ないかもしれないが、物理学などの科学技術はもちろんのこと、コンビニの配送計画のように生活にかかわる場面にも数学は応用されている。実のところ、数学に関して最大の疑問点は、何の役に立つのかではなく、なぜ役に立つのか、という点である。人間が考えたものに過ぎない数学が、なぜこれほど多くの事柄を説明できるのだろうか。

本書では、こうした数学の不条理な有効性が数学とその応用の歴史を追うことで考察される。ここでカギとなるのは、数学は発明か発見かという問いである。本書の一章で説明されるように、どちらの見方をとるかにより、数学の不条理な有効性を説明する方法は変わる。例えば、数学は発見であり、数学的な概念は客観的に存在するという立場をとれば、なぜそのようなもので物理的実体を説明できるのかという疑問が生じる。そして、これは本書の題名の問いにつながる。二章から七章までは数学とその応用に関する歴史の記述が主である。数学史を説明した書物は数多いが、その中でも本書は技術的な内容に深入りすることなく、何が重要であったのかを分かりやすく説明している点で優れている。そして八・九章ではいよいよ数学がなぜこれほど役に立つのかという問題に迫ってゆく。

本書は数学への興味の有無を問わず楽しめる、優れた一冊である。（蕨餅）

（四一二頁　税込一〇三七円　9月刊）

忘れられた黒船
後藤敦史著
講談社選書メチエ

研究の高度化と細分化が進むと裏腹に研究の遅れた分野が析出してくる。ペリーの対日開国要求の背景など戦前あたりに明らかになっていて良さそうだが、二一世紀の今になってなお実は未解明の部分が多い。

本書は幕末外交を研究する日本史家がアメリカ側の史料によって記した研究書体裁の一般書である。題材として本邦では知られないペリー来航と同時期に活動した北太平洋測量艦隊とその司令官ロジャーズに着目する。

そもそも日本開国の直接の目的として捕鯨船の寄港地獲得があることは学校でも習うが、アメリカが本当に求めたのは安全な北太平洋航路とそのための東アジア地域の海図だった。未だフロンティアが残存する若きアメリカが既に抱いていた海洋帝国の構想は我々のアメリカ観を根本から揺さぶろう。

しかるに海図作成のため派遣されたロジャーズを極東で待ちうけたのは「東インド艦隊」との艦艇の取り合いや連絡ミス、そして「下田・箱館」以外への寄港を峻拒する「日米和親条約」の限界だった。しかし過渡期の矛盾はペリーの自己正当化の産物『日本遠征記』では等閑に付され、ハリスと日米修好通商条約という次なる課題とアメリカ本国の南北戦争による混乱のなかでロジャーズの苦難は忘れ去られていった。

外国史と自国史のエアポケットの研究は未だ緒に就いたばかりにみえる。日本史のみならずアメリカ学等の多分野に本書が「黒船」となることを祈念したい。（投稿・とうこ）

（三〇四頁　税込一九九八円　6月刊）

映画とキリスト

岡田温司著
みすず書房

暗闇。一条の光が塵をきらめかせて走り、銀幕に物語を結ぶ。どこか受胎告知にも似たその瞬間の心地よいおののきを求めて映画館に行くのは、きっと評者だけではあるまい。

本書の著者は言う。「映画とはそもそも宗教的なものである。」〝神の死〟後まもなく誕生したこの第七芸術には、にもかかわらず、罪や終末という頻出の主題、世俗化した偶像崇拝とも呼ぶべきスターへの熱狂、宗教儀礼にも比しうる現代の見世物（スペクタクル）の提供、長回しやパンフォーカスによる啓示的映像といった点で、普遍的な宗教性が揺曳しているのだ。

西洋美術を専門とする著者は、とりわけキリスト教の観点に立ち、リュミエール兄弟の『受難』よりこのかた、黎明期に多く制作されたイエスの伝記映画はもとより西洋のシネマが必ずや孕んでいるキリスト教的な要素の表現が、現実の社会情勢や現代思想の文脈の中でどのように変遷してきたかを、多様な例に即して論じてゆく。クィアなイエス、黒人のイエス、女性救世主（クリスタ）――何とも刺戟的ではないだろうか。挙げられる作品は、『ゴダールのマリア』、パゾリーニの『奇跡の丘』、スコセッシの『最後の誘惑』、フェリーニの『道』など、実に一五〇を超える。評者はほとんどを観たことがなかったが、必要十分な内容記述のおかげで淀みなく愉しく読めた。

今月一日より、リュミエール兄弟の作品の修復版オムニバス『リュミエール！』が京都シネマで上映されている。甦ったはじまりの光へは、この本を導きとして。（春海）

（三七六頁　税込四三二〇円　8月刊）

宗教の誕生

宗教の起源・古代の宗教

月本昭雄編
山川出版社

「宗教の誕生」をめぐる宗教学論集である本書は第一部と第二部に大きく分けられる。第一部ではフェティシズム、アニミズム、トーテミズム、シャマニズム、祖先崇拝といった宗教形態について論じられる。これらの概念は、かつて宗教の起源と目されたものだが、今ではその前提である進化論的な宗教発展史が放棄されたものの、実際の宗教現象の分析概念として受け継がれている。

ひときわ印象的なのはシャマニズムの章である。著者の佐藤憲昭は、自ら調査した新潟の女性シャマンの事例を、シャマンの類型論における新たな複合型として提示している。佐藤は調査の一五年後、そのシャマンが病死する前に彼女の希望により、半世紀近くにわたる彼女の日記と「託宣」の録音テープを受け取ったという。宗教学者冥利に尽きるエピソードではなかろうか。

第二部では古代の文明地における諸宗教の具体的実相が紹介される。とりわけ興味深いのが、多様な宗教伝統が共存するなかで、諸宗教の習合・混淆（シンクレティズム）が進んでいく帝政期ローマの情況である。シンクレティズムを拒否したキリスト教は、一方でそれが一因で批判・弾圧されるのだが、他方でそのために独立して存続しえたともいえる。また、シンクレティズムが、後にキリスト教が受容される素地を準備したことも説得的に論じられている。

関心のある章だけ読んでも楽しめるが、通読すると各宗教伝統の交流が窺えて、より刺激的な読書となるであろう一冊だ。（霊人）

（三〇八頁　税込三七八〇円　8月刊）

実践 日々のアナキズム
――世界に抗う土着の秩序の作り方
ジェームズ・C・スコット著
清水展、日下渉、中溝和弥訳　岩波書店

アナキズム。皆さんがこの言葉から感じとるイメージはどのようなものだろうか？　国家は絶対悪で、打倒すべきだと主張する無政府主義を連想される方も多いだろう。また、アナキズムという言葉そのものに時代錯誤な違和感を覚える方も少なくないかもしれない。

本書でスコットが検討するアナキズムとは、これらのありがちなアナキズム理解とは一線を画したものである。むしろスコットは、国家の役割を肯定したうえでよりよいガヴァナンスを導きだすための役割をアナキズムに期待するのである。

点数至上主義の教育、規則至上主義の交通規制……日常生活のいたるところで、上からの画一化や支配が進展し、私たちの自主性や自律性は奪われている。このような流れはほとんど不可逆にもみえる。しかしスコットは、上からのルールの押しつけに一人ひとりが抵抗し、その中で個人としての尊厳を回復することがいかにして可能であるかを豊富な事例をもって例証していく。こうした可能性の追及こそが、スコットが定義するところのアナキズムであり、一人ひとりがアナキズムを実践することを通じて国家もまた個人の尊厳をより配慮するようになるのである。

本書は、スコットがこれまで体験してきたエピソードを中心としたエッセイ集であり、読みやすい。エピソードはどれも説得的で、本書を読み終わったとき、あなたもまた、アナキズムを実践せざるをえなくなるだろう。

（投稿・ケン）

（一九五頁　税込三〇二四円　9月刊）

政党政治の制度分析
――マルチレベルの政治競争における政党組織
建林正彦著　千倉書房

二〇一七年一〇月に行われた衆議院選挙は、大方の予想通り、自民党の大勝という結果に終わった。選挙前に、野党第一党の民進党が分裂し、「希望の党」と「立憲民主党」に分かれるという混乱が起き、政権に批判的な票が分裂したことが自民党の勝利を後押ししたと言われている。

二大政党制を目指し、政権交代可能な政治を目指した政治改革の結果、自民党に対抗できる政党が二〇〇九年以降出現しておらず、「一強」体制がますます固定化しているのはなぜか。本書では、政治改革が当初想定していた政治の姿が一面的であったことを、緻密な分析と豊富なデータを用いて論じる。ここから見えてくるのは、政治の姿は普段、論じられているほど単純なものではなく、様々な要因が複雑に影響しあったものであり、一部の制度を変えたからといってすぐに期待通りの効果が得られない、という、簡素にして明瞭で、重要な答えに他ならない。

特に、地方政治や参議院をめぐる制度が、今日にいたるまでほとんど手付かずのままになっている点は重要である。諸制度の関係性が歪なことで、有権者が投票先を判断するコストが高くなっていると著者は指摘する。こう考えると、低い投票率にも納得がいく。

政党政治が混迷を極める中、適切な分析に則った議論が何よりも求められる。本書はその要請に十全に応答した政治学の最新成果である。政治を憂う全ての人々が手に取るべき一冊だと言える。

（投稿・藪池）

（二六一頁　税込四九六八円　10月刊）

中原中也 沈黙の音楽

佐々木幹郎著
岩波新書

かくて私には歌がのこつた。
たつた一つ、歌といふがのこつた。
（未発表詩篇「処女詩集序」より）

若き一時期を寺町今出川で暮らしたこの詩人における詩の生成を、同志社出身にして自らも詩作する中也研究の第一人者が新資料をもとに追究する。敬意に満ちた丁寧な仕事だ。

中也の生前に刊行された詩集は『山羊の歌』しかない。そのため、未発表詩篇や推敲過程が残された創作ノートを繙けば同時代や過去との共鳴・反撥の模様を跡づけられる。大正の天才主義の風潮、ダダやランボーとの出会い、批評家や演奏者との交友―これらを通じて立ち現れた詩情は、やがて冒頭に引いたごとく「歌」に結晶した。そこに中也の精華を見る著者によれば、それは実際の音響ではなく、《汚れつちまつた悲しみに／今日も小雪の降りかかる》の雪のような、一種の恩寵のようなしんしんとした沈黙の音楽である。

彼の詩は、かなしみで空になってゆく心のふるえのようなものなのだろう。寒空の日々に、優しくかみしめたいものだ。（春海）

（三〇四頁　税込九七二円　8月刊）

生と死のことば
―中国の名言をよむ

川合康三著　岩波新書

人々の関心事にならざるをえないのが生と死に関することである。有名な書物を軽く繙くだけで昔から人がそれにどれだけ関心をひかれたかがよくわかるだろう。その生死に関する中国の偉人たちのことばを集めて平易に解説したのが本書である。特に評者にとって中国の偉人たちのことばは、死を乗り越えて生を謳歌せよと言っているように思える。

孔子が自らの弟子に自分のことについて《その人物たるや、興奮して食事も忘れてしまい、老いが迫ってくるのも知らずにいる、そんな人だと。》と語ったという。彼は自身を食事をも忘れ、死へと刻一刻と迫る老いの恐怖をも知らないような人であると言う。つまり、これは死を忘れ今の現実の生をただ楽しむということを宣言しているのである。

必ず人間は死ぬ、これは逃れられない運命である。このことを彼らはよくわかっていたはずだが、偉人たちは死から逃れようと全力で現実の生を肯定しようとする。そんな生死の狭間で揺れることばを集めた本書はどんな人の心をも打つはずである。（いいろう）

（三二四頁　税込八四二円　10月刊）

死刑 その哲学的考察

萱野稔人著
ちくま新書

「死刑論」はディベートにおける定番である。賛否が分かれ、繰り返し論じられてきたこのお題を、一度徹底的に深めてみてはいかがだろうか。その導きが本書である。

本書の前半では、死刑の道徳的解決を不可能とする。「目には目を」という論理で殺人には死刑を求刑する応報論も、「絶対に人を殺してはいけない」という寛容論も道徳的に導けるからだ。そこで本書は政治哲学として権力のメカニズムから死刑の限界性を考える。そこで考慮されるのは「冤罪」だ。

多くの人は「冤罪」を制度的ミスとして考えるが、著者は実際の冤罪事件を例に、自白の強要や作為的な捜査を示した上で、「冤罪」が権力的に生成されるものだと考える。捜査や裁判の構造として必然的に冤罪が生み出されるのであれば、死刑は冤罪をとりかえしのつかない次元にしてしまう点で正当化できない。この点が本書の白眉だ。最終的な極刑の代替として終身刑を提示する。

予想される議論を見事に捌いた本書は死刑を慮る人の必読本となるだろう。（きもの）

（三一八頁　税込一〇一八円　10月刊）

新本格三〇周年――新本格と京大推理小説研究会（Ⅰ）

読者カードの中に時折「京大出身の作家の特集をしてほしい」という要望がある。なので、今回はそれに応えて、京大出身作家、特に九〇年代に新本格と呼ばれるミステリーのムーブメントを支えた作家たちを紹介したい。

新本格とは何か？

「新本格とは何か？」という疑問から始めよう。八〇年代まで当時の風俗や社会問題を盛り込んだ「社会派」がミステリー界を覆っていた。例外はあれ、正面から密室、論理、名探偵などを扱う古典的な本格ミステリーは時代錯誤とされた。しかし、『**占星術殺人事件**』（講談社文庫）でデビューし、作家としての地位を築いていた島田荘司は「本格」の復権を目指した。その彼の目に留まったのが京大の推理小説研究会だったのだ。週に一度の例会でまさに時代錯誤ともいえる「読書会」や「犯人当て」を行う同会から島田は多くの才能を見出した。そして、先輩作家として推薦し、世に送り出した。その最初の一人が綾辻行人だった。彼のデビュー作『**十角館の殺人**』（講談社文庫）で登場人物の述べる「ミステリにふさわしいのは、時代遅れと云われようが何だろうが、やはりね、名探偵、大邸宅、怪しげな住人たち、血みどろの惨劇、不可能犯罪、破天荒な大トリック……。絵空事で大いに結構。要はその世界の中で楽しめればいいのさ。但し、あくまで知的にね」という台詞はその本格復古の宣言として受け止められた。さらに、法月綸太郎、我孫子武丸が相次いでデビューし、作風はそれぞれ異なるが、同志社出身の有栖川有栖、早稲田出身の北村薫や山口雅也の登場もあり、新しい時代の本格――「新本格」が認知されるようになった。その綾辻のデビューから今年で三〇年――新本格三〇周年と言われる所以である。

新本格御三家

このように始まった新本格だが、特に島田が推薦した京大出身作家である綾辻、法月、我孫子は「新本格御三家」として大きな存在感を放っていた。綾辻行人は《館シリーズ》と呼ばれる作品群を発表し、「叙述トリック」という手法を本格ミステリーに定着させた。評者のお気に入りは『**迷路館の殺人**』『**時計館の殺人（上・下）**』（講談社文庫）となるが、このシリーズはできる限り、発表順に読むことをお薦めする。綾辻の作品の多くは映像化が困難だが、ホラー風味の『**Another（上・下）**』（角川文庫）はアニメ化もされ、好評を博した。そして、次にデビューした法月綸太郎はエラリー・クイーンへの偏愛を隠さず、『**頼子のために**』（講談社文庫）などではクイーンの問題意識を引き継ごうとした。評論でも法月は柄谷行人を援用した「初期クイーン論」で名探偵のあり方に揺さぶりをかけた。この論によって「後期クイーン問題」と呼ばれる問題意識が生まれた。我孫子武丸はノベルゲームの最初期作「かまいたちの夜」の作者として有名かもしれない。初期には喜劇タッチの作品を発表したが、代表作『**殺戮に至る病**』（講談社文庫）などはサイコホラーの趣が目立つ。評者としてはそれよりも映画への愛情、ささやかなラブコメが楽しめる『**探偵映画**』（文春文庫）を推薦しておこう。この三人がいなければ、現在のミステリー・シーンはまったく違うものになっていただろう。

（左につづく）

新本格三〇周年——新本格と京大推理小説研究会（Ⅱ）

新本格の浸透と拡散

この新本格御三家は質の高い作品を目指し、寡作を貫いている。だからこそ、その中での読者の飢えと彼らをリスペクトする後続作家の登場は必然的なことだった。そんな状況下で現れた京大出身の新本格作家が麻耶雄嵩である。あえて真相を明示しないなど異色の作家だ。比較的ストレートな『**鴉**』や『**螢**』（幻冬舎文庫）なども読者を騙そうとする姿勢が徹底されている。月九で『**貴族探偵**』（集英社文庫）シリーズがドラマ化もされた。その麻耶の後に登場したのが清涼院流水だった。異様なコンセプトで発表された初期作は、従来の読者からは批判を受けたが、後の世代、たとえば立命館出身の西尾維新らには大きな影響を与えている。西尾維新も最初は「新本格」の流れとして捉えられたが、ミステリーの部分よりもキャラクター小説としての側面が強くなっていった。この頃から新本格の「浸透と拡散」が盛んに叫ばれるようになっていく。

ポスト新本格の本格作家たち

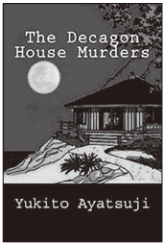
清涼院流水以降、京大推理小説研究会出身の作家は影を潜めてしまう。翻訳家から作家となった大山誠一郎も大胆な構図の反転を魅力とするものの、兼業作家で作品数は多くない。ドラマ化もされている短編集『**赤い博物館**』（文藝春秋）がお薦めだろうか。

しかし、その後、新本格に新たな息吹を吹き込む作家が相次いでデビューしている。円居挽や森川智喜、早坂吝である。いずれも京大推理小説研究会に所属したことのある作家たちだ。この中で、評価が一つ抜きんでているのが円居だろう。キャラクター小説とミステリーを融合させ、疑似裁判を舞台にどんでん返しを多用している。『**丸太町ルヴォワール**』（講談社文庫）から始まったシリーズは多くのミステリー・ファンに歓迎された。森川智喜はとにかく変わった作品の書き手だ。《三途川理シリーズ》では探偵役の三途川はむしろ悪役となり、特殊なガジェットを巡って、主人公たちと争いあう。童話やSFをモティーフに作品を発表しており、現在のところ『**スノー・ホワイト**』（講談社文庫）が代表作だろうか。早坂はバカなミステリー（略して「バカミス」）の書き手として認知されており、タイトル当てという変わった趣向の処女作『**〇〇〇〇〇〇〇殺人事件**』（講談社文庫）からエロ路線と謎解きの融合を目指しているようだ。三者とも賛否両論はあるようだが、新しい時代のミステリーの書き手として注目されているのは間違いない。

新本格はガラパゴスなのか？

海外のミステリー界では登場人物の心理が優先され、トリックという側面はあまり重要視されていない（それでも、本格好きも満足させてくれる作家も多いが）。新本格は日本の中だけで機能してきたのかもしれない。しかし、その状況も近年大きく変わりつつある。短編が英米のミステリー雑誌に翻訳され話題を呼び、綾辻の『十角館』などもペイパーバックとして英米に発表された。「本格」という言葉も古典的な謎解きミステリーを名指す言葉"honkaku"として紹介されている。京大が起点となった日本の「新本格ミステリー」が世界に認知されていくのもありえない未来ではないかもしれない。

（投稿・黄金虫）



編集後記

この文章を書いているときも大分寒くなってきましたが、おそらく本号を読んでいるときは12月でしょうからもっと寒くなっていることだろうと思います。

めっきり寒くなりましたねぇなどとよく言われますが、私は毎年季節が巡って同じような時期に春夏秋冬が訪れるのにそれに慣れないのはなぜなのかと不思議に思います。だから、それがわからずに毎年風邪をひいてしまい困ります。それは人間の身体が原因して…という理屈はいくらでも考えられていますけど、私は季節と私たちが何か一期一会みたいな関係なのかなぁと思いたいです。季節は春夏秋冬という毎年毎年同じ季節が訪れて巡るというような繰り返しではなく、毎年違う夏や冬が来るんだと思います。だから、体が慣れなくて風邪をひいてしまうんでしょうか。『綴葉』も読者の方々とそういう毎号新鮮な関係が構築できるように日々目指していきたいところです。

それと『綴葉』は読者の方々の投稿もお待ちしております。流行りものの本でも最近感銘を受けた本でもどんな本でも構いませんのでぜひお送りください。　（ういろう）

当てよう！ 図書カード

海のない京都盆地を照らす燈台のイメージだとも、東本願寺の近くだから和蠟燭のイメージだとも言われる京都タワー。駅の大階段にクリスマスツリーが登場する今月は、その白さがいっそう夜空に映えます。さて、次のうち京都タワーが見えないのはどこでしょうか？

1. 烏丸御池の交差点　　2. 愛宕山山頂
3. 叡電一乗寺駅前の踏切　　4. 清水の舞台

（春海）

《応募方法》読者カードに答えを書いて生協のひとことポストに入れてください（またはe-mail:teiyo@s-coop.net）。正解者の中から抽選で5名の方に図書カードを進呈いたします。締切りは1月15日です。

8・9月号の解答

8・9月号の「京都と札幌で日の出の時刻がほぼ同じになるのは次のうちいつでしょう？」の解答は、4. 冬至　でした。応募者8名中6名の方が正解でした。図書カードの当選者は、是我痛さん、あおむしさん、松葉牡丹さん、蟹江西鶴さん、よっさんさん（順不同）です。おめでとうございます。　（ねこ）

読者からひとこと

○ノーベル賞受賞に関するテーマでとりあげてほしいです。　（教育・あおむし）

――ご希望にお応えして今月はノーベル賞作家カズオ・イシグロの新刊を扱いました。書評いかがだったでしょうか。他のノーベル賞作家もどこかで扱えたらなと思います。

○一〇月号編集後記はすごく味があり素敵ですね。今後も期待しております。　（理・トトロ）

――ありがとうございます。編集委員は文章が上手な者が多いので、書評だけでなく、今後も編集後記にご期待ください。

○（八・九月号特集「手紙」に関して）小学生の頃は手紙交換が好きでよくやっていました。最近は手紙を書かなくなって久しいです。葉書やポストカードならハードルが低く書ける気がするので、今度誰かに送ってみようかと思います。　（文・やきのり）

――気付けば今年も終わりの月に差し掛かり、年賀状の時期となりました。普段手紙を出さない方も、年賀状なら気軽に書けるのではないでしょうか。来年の干支は「戌」。懐かしい記憶と共に新年を迎える手紙を、是非一筆書いてみてください。　（きもの）